

---

# 桜散る頃。。。そして花開く

ルル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

桜散る頃。。。そして花開く

### 【Zコード】

N6103C

### 【作者名】

ルル

### 【あらすじ】

大人でも子どもでもない微妙な年齢の奈美。そんな奈美が様々な出会いの中で真実の愛にたどり着くちょっと悲しい愛の物語。

## 第一話

『何やつてんだろ。。』

ベットに横たわりながら奈美は呟いた。  
横にはさつきまで奈美の体を愛していた正樹が  
幸せそうな笑顔を浮かべながらで眠っている。

付き合いだしたのは1年半前の暑い夏の事だった。  
バイトのセンパイの紹介で正樹とは知り合った。

正樹の男らしいところに奈美は心惹かれ

2人が付き合いだすまでにそう時間は必要ではなかった。

冷たい涙が奈美の頬をつたつた。

奈美自身何故涙が出るのか分からなかつた。

しかし、奈美の魂は感じていた。  
こんなのが『愛』じゃないといふことを。

会つ度に体を求めてくる正樹。

『何故?』という奈美の問いに正樹はいつも同じ事を言った。

『好きだからだよ。』そういう彼の答えに奈美はいつも拒むことができずにいた。

肌を重ねている時だけ自分が愛されていることを実感した。

そう。。。彼女はまだ本当の愛を知らない。。。

## 第一話

今日は久しぶりの正樹とのデート。

奈美は朝からはしゃいでいた。

しかし正樹はそんな奈美を気にする暇もなく人ごみを掻き分け歩いていった。

『待つてよ〜。』

奈美は正樹の背中を追つ。

息を切らせながらやつとの思いでたどり着いた奈美に冷たい一言。

ついでに正樹の蹴りが奈美の細く真っ直ぐな足へと放たれた。

『何でそんなことあるの?..』

今にも泣き出しそうな声で奈美は叫んだ。

『お前が悪い。』

正樹はそう吐き捨てた。

いつもそう。せっかくのトーントークなのにケンカにならなかつたことなんか一度もない。

アタシがもつといい子にならなきゃいけないんだ。。。

奈美は今にも溢れそうな涙をこらえながら自分の腕を力一杯つねった。

その腕にはたくさんの青あざがあつた。

正樹から受けた暴力の痕だ。

真っ白な肌に呪いでもかかつたかのようなその紫の痣は奈美の心をも支配していた。

でも奈美にとつてはこうじつた付き合い方に疑問を持たなかつた。逆に言えばこうじつたことが付き合ひことだと思い込んでいた。

会つ度に求められる体。

2分と持たない会話。

ナイフのような言葉。

それなのに奈美自身も分からなかつた。

どうしてこんなにもこの男を愛しているのかを。

何故こんなにこの男を自分が必要としているかを。。。

ただ一つ言えることは奈美はまだ知らない。。。  
本当の愛を。。。

魂は叫ぶ

コンナノアイジヤナイ。。。

ハヤクキガツイテ。。。

## 第三話

『いらっしゃいませ〜！』

奈美の威勢の良い声が店内に響き渡る。

バイト暦3年。

センパイ達は就職で次々辞めていき、

今では奈美がバイトをまとめているくらいだ。

『近藤〜！～ちょっとこいか？』

店長に呼び止められ奈美は手を止め振り向いた。

『ハイ。』

『この商品の陳列なんだけど。。。』

『つするともっとよくなると悪ついだけビー！次回からこの方向で頼むよーー。』

たかが雑貨屋のバイトだし。

お金稼げればいいし。

最初はそんなことしか思ってなかつた。

でも2ヶ月前から今の店長。稲葉に変わり今までのやり方とは全く違う仕事を要求された。

商品の陳列から、キャッチコピー、展示物、照明など。。

最初の頃奈美は

『これだけで何も変わるものないし。本当に嫌になる。』

としか思つていなかつた。

しかも細身で長身の色白。しかも長髪でか弱い感じ。奈美が嫌いなタイプだ。

奈美にとつて男と言つたら色黒でガツチリ。

男の中の男といったような正樹みたいな男のこと指す。

でも外見とは裏腹で稻葉はテキパキ仕事をこなし誰よりも一番動いた。

一言も愚痴をこぼすことなく、バイトの子たちのことを見、そしてよい店にするにはどうしたらよいかをいつも考えていた。そしてこの2ヶ月で売り上げは2倍近く上がった。

数字としての結果が出ると奈美も頑張りのつと思つた。

そして、そんな稻葉を見て奈美は稻葉に認められるために、讃められるために必死に働いた。

何より稻葉を尊敬していた。奈美にとってこのバイトは自分が認められる唯一の場所だった。

稻葉自身もひたむきに働く奈美を信頼していたし可愛いことさえ思つた。

だから奈美が元気がない日はとても心配で奈美が望むなら夜中まで相談を聞いたことだつてあった。

この子を傷付けるものはたとえどんな者でも許さないと思つた。

魂は叫ぶ

コレハアイナノカ。。。  
アイダトシタラナーラロダ。。。

## 第四話

『うつつかお前に何が分かるわけ?』

電話にしの正樹は苛立ちを隠せない様子だった。仕事で大きな商談をしくじつてしまつたらしい。

プライドの高い正樹のことだ。

さつと、じいじだとばかりに同僚からも嫌味を言われたに違いない。

励ましの言葉をかける奈美の言葉は正樹の耳には届かない。

『一十歳にもなつていないとお前にそんなこと言われたくない。お前なんか、たかが雑貨屋のバイトだろ。俺はお前みたいにお遊びで仕事をしているわけじゃないんだ。』

この言葉にさすがの奈美も嫌気がさした。

(この人はアタシのことなんて全く認めようとしてくれない。アタシってこの人にとって一体何なのだらう。。。)

そんなことを考えながら眠りについた。

次の日、バイトでの休憩室で奈美は深いため息をついた。

『近藤。元気ないなあ。何があつたか?』  
声をかけてきたのは稻葉だつた。

奈美は昨日の一部始終と、奈美自身よく分からぬ心のわだかまり

を全て稻葉に話した。

言葉を詰まらせながらも説明する奈美を稻葉は優しく見守りながら最後まで聞いた。

『 そりゃ。そんなことがあったのか。つらかったなあ。  
お前は一人で考えすぎるところがあるからな。  
何かあつたら連絡してこいや。』

そんな稻葉の優しい言葉に奈美は涙が出そうだった。

奈美の中で正樹への感情が少しずつ、しかし確実に何かに吸い取られるように薄れて行つた。

魂は叫ぶ

ソウダ。アノオトコジャナイ。チガウンダ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6103c/>

---

桜散る頃。。。そして花開く

2010年11月25日17時29分発行